Fate/RADIANT MYTHOROGY

蘇芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆａｔｅ／ＲＡＤＩＡＮＴ　ＭＹＴＨＯＲＯＧＹ

【Ｎコード】
Ｎ７９８７Ｙ

【作者名】
蘇芳

【あらすじ】
布団で寝ていたはずが、なぜかグラニデとかいう世界で救世主と言う名のディセンダーになりました。解せぬ。
なんやかんやあって戻った３年後、変な青タイツの人に殺されかけました。どうやら第五次聖杯戦争と言う名の殺し合いに巻き込まれた模様です。まじ解せぬ。
そんなノリでお送りする、まるでだめな作者の自己満足極まりない小説です。なにもいわず、生暖かい目で見てやってください。よろしくお願いします。

設定&注意（前書き）

この小説の作者は、小説を執筆するのは初めてです。
それを頭のはじっこの片隅に置いて読んでいただけたら幸いです。

設定&注意

設定

名前　高倉（たかくら）　奏（そう）
性別　女
年齢　１７
身長　１６７ｃｍ
体重　５８キロ
容姿　知的な印象ではあるが特別美人でもなければ特別可愛いわけでもない。割と筋肉質以外特筆すべきことは無い。つまりはご想像にお任せします。

補足という名の詳しい設定

中二病からようやく離脱しかけていた中学3年生の夏、寝ていただけのはずなのになぜか魂だけがテイルズの世界へ。解せぬ。
しかもマイソロ2の世界で、なぜか自分がディセンダー。まじ解せぬ。
なんやかんやでエンディングを迎え、なんやかんやで魂が身体に戻り、今に到る。時間はそのまま進んでいませんでしたと言うよくあるご都合主義。
中二病はとりあえず治ったけど完治はしておらず、まだその名残がある状態。

使う予定の職業

魔法剣士
盗賊
ビショップ
狩人
海賊

の予定です。

注意

この小説はあくまで自己満足の元書かれた小説です。
あ、無理だな。合わないな。ツマンネ。と思われた方は、なにも見なかったことにして他の面白い小説を読まれることをお勧めします。
つまり何が言いたいかというと、絹豆腐メンタルなので罵詈雑言はしないでください。
お願いします。

第一話という名の導入部（前書き）

急ぎ足の説明みたいになってしまいました…。

第一話という名の導入部

突然で申し訳ないのだが、皆様は何の前触れもなく理不尽な目に遭遇したことはあるだろうか。

どんな事だって良い。小さなことでも、ほんの些細な、取るに足らない事だって良い。

例えば、給料日でお金を下ろしたばかりなのに財布を落としてしまったとか、学校でいきなり抜き打ちの持ち物検査やらテストやらがあったとか、バイト中に自分以外の誰かが起こしたミスを自分のせいにされ怒られたとか、交通ルールをしっかりと守ったのに相手の不注意で事故にあったとか。
やはりこれは十人十色。人の数だけ色々なことがあるのだろう。

さて、話は打って変わって、いきなり理不尽な目に遭遇したら皆様はどうするだろうか。

泣く？怒る？呆れる？呆然とする？唖然とする？途方に暮れる？現実逃避をする？現状打破に勤しむ？
やはりこれも十人十色。人の数だけ様々な方法があるのだろう。

またも話は打って変わって、なぜ皆様にこのような問いかけをしたのか、疑問に思っている方もいらっしゃるだろう。

しかしこれから話すことは荒唐無稽、俄かには信じがたい代物である。
だが、この話は本当に起きた出来事であって、妄想、空想、創造、などでは決して無い。
まあ、別にその話を何も一から十まで全部信じろとは言わないので、その一から十の前にある根本的な前提部分として信じてほしい。…覚悟はよいだろうか？

最初から最後まで語ってしまうと長くなるので簡単にまとめてしまうと、

布団で寝ていたはずなのに、気が付いたら異世界で、しかも救世主になっていた。

……うん、その反応はご尤もだ。間違っていない。間違っていないどころかむしろ正しい。
私も見知らぬ人間にそのようなことを言われれば間違いなく引く。たとえ友人でも引く。その出会いを無かったことにしてしまいたくなるくらいにドン引く。

だが、悲しいことに事実なのである。
布団で寝ていたはずなのに、なぜか上空で、しかも船を目掛けてパラシュート無しのスカイダイビング状態だった。…今考えるとよく死ななかったな、自分。
…まあそれはさておき、ひと悶着合ったりしながらもバンエルティア号という船に乗せてもらえることになり、グラニデという異世界と判明し、剣位は覚えておいたほうがいいと言われなぜか剣を習い、この世界にはディセンダーって言う救世主がいるんだよ☆ってピンク髪の美少女に教えてもらって、またひと悶着おきて、
某ドラゴン的なクエストな勇者よろしく、実は私が世界を救う救世主（ディセンダー）でした☆な落ちで。
そこからまたまたひと悶着合ってラスボスが判明して、ラスボス倒す準備をして、ラスボス倒して、エンディングを迎えてこっちに戻ってきました。おしまい。…な具合で。

…ん？今途中色々すっ飛ばしたろって？いやだって、長くっても面倒くさいだけでしょう？

あれ、何の話をしてたんだっけか。

…ああ、そうそう。理不尽な目に遭遇したときの話だ。

もちろん、最初は何で私がこんな目に、とか思ったけれど周りの人たちがよかったのか最初以外はそこまで理不尽なこととは感じなかった。本当に最初以外は。

そう、私が果てなく理不尽だと思ったのは異世界に飛ばされたことではない。
異世界に飛ばされた後のこと、つまり今だ。

こっちに戻ってきた後、異世界に飛ばされる前とまったく変わりない生活を送っていた。
普通に勉強して遊んで…、と別に何が変わったでもなく普通に過ごしていた。
受験も無事終わり、高校は近場の穂群原学園に入学した。
成績も上の下から中の上あたりをうろうろしているし、運動神経も抜群に良い訳ではないが、練習すればそれを極めている人ほどではないが、結構動ける。

ただ、ひとつだけ、おおきく変わったことがあった。

上に挙げたとおり、頭がすごく良くなったとか、運動神経が抜群に良くなったとかそういうわけではない。

ディセンダーとしてなのか、ただ単に経験が付いてきただけなのかは分からないが、

５つの職業（クラス）に変身（チェンジ）することができるようになったのだ。

いや、高校生にもなって変身っていう表現どうよとか思わないでもないのだが、表現としては間違っていないのでスルーして欲しい。

話を戻してそのことに気が付いたのは約２年前のことである。
それなりに高さのある階段から落ちそうになって思わず受身を取ろうとしたらなぜか盗賊に職業変更（ジョブチェンジ）していたのだ。わけがわからないよ。
もう少し格好良くその事実に気が付きたかったと落ち込んだのは、まぁ内緒の話にして置くとして。

わかったことが、自分の意思で自由に変身できる。変身できるのは、魔法剣士、盗賊、ビショップ、狩人、海賊の５つ。その職業の共通点はレディアント装備を持っていることだ。まあつまりは普通の制服からファンタジー要素満載なレディアント装備に変わるのである。

さて、今ここで職業変更（ジョブチェンジ）について説明し始めたことに、察しの良い人なら何か感づいたかもしれない。
いや、大体の人が私の回りくどい話にイライラしているかもしれないので回りくどいことは言わない。

端的に言ってしまえば私は今、狩人のレディアントに職業変更(ジョブチェンジ)をして逃げ回っている状態である。

なぜなら私は今、どこからも疑いようもなく果てなく理不尽な目にあっており、

全身青タイツの槍を持った青年に追い掛け回され命の危機に瀕しているからである。まじ解せぬ。

第二話という名の回想劇

さて、またも突然で申し訳ないのだが、私が如何にして全身青タイツの槍を持った奇抜な青年に追い掛け回されることになってしまった経緯をお話しようかと思う。

事の始まりは、英語の課題を学校に忘れてきてしまったことだった。

授業が終わった後、教室の掃除を手早く済ませいつものように教室で友人達と課題だるいねーとか喋っていたら見回りの先生から早く帰るよう促されて、慌てて逃げるように教室を出たのがいけなかった。

そしてまたそこから名残を惜しむように友人達とそこそこな時間まで公園で喋ってしまったこともいけなかった。

そして家へ帰り、母親の今日から出張ですと言うメモ紙を発見して、ああそういえばとそんなことを言っていたなと思いつつ、母親が作り置きしてくれていた夕食を食べ、さぁ課題を終わらせてしまおうと机へ向かった時に、課題を学校へ忘れたことに気が付いたのだ。

しかも時計の針が夕方から夜へ移動するかしないかと言う時間で、課題を取りに行くならダッシュで行かなければ学校がしまってしまうような時間だった。

英語の担当は藤村先生だし英語は一限目からだし朝から虎の咆哮を聞きたくない一心で、部屋着から制服に急いで着替え、学校へ向かったと言うわけだ。

ぜぇぜぇと息を切らせながらも学校へつき、幸運にもまだ昇降口は開いていたのでほっと胸を撫で下ろしつつ、夜の学校にびくびくしながら課題を取りに行った。

特に何事もなく教室へつき、課題を取って少し気が抜けてしまったのがいけなかったのかも知れない。全力疾走で疲れていた身体を少し休めてから家へ帰ろうと思い、それを実行したのがいけなかったのかも知れない。

いやだってまさか学校の校庭でドンパチやってる人達がいるとは思わないじゃないっすか。

今になってからこんな風に軽く言えるが、それを目撃したときの心情は半端なかった。全身青タイツと思われる青年と赤いマント靡かせた青年が戦っていた。しかも赤い青年の後ろにはたぶん私と同年

代と思われる少女も居た。どういうことだってばよ。
え？あれ？ここって日本だよねあれ？って言ってしまうくらいには動揺した。ていうか思わず声に出した。まぁ、自分でも聞こえるか聞こえないかくらいに声は掠れていたけど。

今までの経験か、それとも人間の本能としてかは分からないけれど思わず学校の女子トイレに逃げ込んだ。いや、だってテンパってたんです。
そして校内が少し騒がしくなり、落ち着いて暫らくしたころを見計らって外に出た。
案の定、校庭にはもう誰も居なくて、でもいやな緊張感は拭えなくて、夜の学校に入ったとき以上にビクビクしていたと思う。

とぼとぼ歩きながら、あぁあれって白昼夢だったのかなとか、疲れてたのかなとか、少し余裕を持って考えられるように落ちついた頃。変な夢だったなぁとか、疲れすぎて幻想でも見たんじゃないかと思いながら角を曲がった。———刹那。

「よお」

と、青年の声。

どこから？

「いい、月夜だと思わねぇか」

わ　た　し　の

「なぁ、嬢ちゃん？」

―――――！　　後　ろ　から―

頭で理解する前に、本能が、全神経が、殺気を感じ取る。

逃げ切ることは、きっとできないだろう。

必然的に、殺し合いになることはもう、理解（わかって）している。

ならば…！

「…へぇ、今のを避けるたぁやるじゃねぇか」

「……ま、命懸かってますし？」

「ただの女学生だと思ってたんだがよ、俺の槍は避けるし、今、一瞬で姿が変わったな。

そのけったいな格好と、嬢ちゃんが一体何者かを、俺に教えちゃくれねぇか？」

「…答える義理は、ないですよね」

「はっ、そりゃそうだ。
まぁ、喋りたくなるようにすりゃいいだけの話だ……！」

「っ、むざむざやられてたまるかよ！！」

そして、私たちは、私と彼は走り出した。

私は彼から逃げるために。

彼は私を追いかけるために。

――――――――――――――――さて、前にも話はしたが一応私が変身した職業を教えておこう。

私は、戦える広い場所まで走るために、

五つの中で、一番敏捷値の高い
狩人に、職業変更をしたのである。

そうして話は、現在に戻る。

いや、でも全身青タイツってどうよ？

第二話という名の回想劇（後書き）

あれ、もしかしてシリアスぶち壊し？

第三話という名の戦闘劇（前書き）

捏造が入ってます。戦闘シーンがしょぼい上に少ないです。

第三話という名の戦闘劇

こうして私は紆余曲折を経て、全身青タイツの槍を持った青年に追いかけられることになったのである。

というわけで、現在。
決して近いとは言えないが全力で走れば近いかもしれない、そこそこの広さのある公園、というかほぼ空き地に向かって爆走中である。

その槍を持った青年は、あくまでも私の勝手な想像なのだが、少し楽しんでいる風である。
きっと、コチラの意図に気が付いているのだろう。
一体どこまでやれるのか、お手並み拝見といこうじゃないか、といった心境なのだろうか。それとも、どう甚振ってやろうかなんて心境なのだろうか。どちらにしろ腹立たしい。

とはいっても、結構いっぱいいっぱいなのでどうすることもできないのである。世の中って世知辛い。

しかし、自分が最速最強と驕っている訳ではないのだが、常人には追いつけないほどの速度で走っているにもかかわらず、青年は引き離されること無く付いてきている。

まあ校庭でドンパチやっている時点で普通の人間ではないと思ってはいたが、ここまで来ると本格的に人間でない事が伺える。
しかも一種の神々しさと言うかなんというか、ありていに言ってしまえば魔力（マナ）の塊というか、魔力（マナ）が人型をとりそれに魂が宿ったように感じられる。

要するに幽霊もどきですねわかります。

物理攻撃って通用するかな属性攻撃：光とかじゃないと通用しないのかななにそれこわい。話がそれた。
いや落ち着くんだ、私。よく考えろ、私。
今の状況をよく確認すれば、必ず勝機は見えてくるはずだ。

童話に出てきそうなファンタジーな狩人のレディアント装備姿で爆走する、私。
それを追いかける、全身青タイツの槍を持った青年。

なにこれシュール。
余計に混乱しただけだった。
なんてアホなことを考えながら角を曲がる。目的地はもうすぐそこだ。

公園に着き、走るスピードを少し緩め、スライディングをしながら後ろを振り返る。

すでに青年は停止しており、不敵に笑んでいる。しかも、青年と私の距離は大分離れており、まるで、こちらの攻撃を誘っているかのようだ。

考えすぎと思われるかもしれないが、先ほどは攻撃できるような隙も無ければ、後ろを振り返る余裕も無かったほどに追い詰められていた。
……完全に、攻撃誘われてますよねこれ。

しかし、なぜ彼はこれほどまで、未知数の敵の前で余裕を持っていられるのだろう。

私の能力を知っている？――――――いや、彼は私にそれはなんだと問いかけた。それは無い。

彼は自分自身を最強だと思っている。――――――ありえるかもしれないが、そういうタイプには見えない。

残る可能性としては、――――――――――。

「なんだ、もう逃げるのはやめたのか？」

「逃げ切れると思えないし、ちょっととある可能性を確認したかったんで、ねっ！！」

――――――――――――敵から視線をはずさないままに、別方向に魔力（マナ）をこめて、弓を引き、矢を放つ。

その魔力を帯びた矢は、彼に一切触れることなく、一直線上にある木に突き刺さる。

――――――――ビンゴ！

「おいおい、俺のことちゃんと見えてるか？どこに向かって撃ってんだ？」

「…お兄さんには、矢避けの能力（スキル）でもあるのかな？」

「…！？……へぇ、なんで分かった？」

「今撃った矢は、狙った敵へ向かって行く矢だったんだよね。

成程、お兄さんが余裕ぶっこくのも当然ってわけか」

「嬢ちゃんとの相性は最悪だぜ？潔く、諦めて俺に殺されるか？」

変身したとき、私はすでに弓を持っていた。
それを見て、彼は油断はしなくとも、余裕を持っていのだ。

相手の攻撃は自分に当たらず、自分の攻撃は相手に当たる。
私が言うのもなんだがずいぶんとまあチートな能力（スキル）だこと。

しかし、このままじゃまずいのも事実だ。
なるべく自分の手の内を明かさないのがベストなのだが、もうそんなことを言っている暇は無い。

――――――ならば。

「冗談きついぜお兄さん。確かにこのままじゃお兄さんとの相性は最悪だ。
だけど最悪なのは、狩人との相性だけであって、
他なら、難しいけど、最悪じゃない」

「…また、変わったな。
今度は、剣士か…？」

「ご名答」

ま、剣士は剣士でも魔法剣士だけどね。
声には出さず、改めてのステータスを確認する。スピードも申し分ないし、攻守ともにバランスの取れた職業。
命のやり取りをする戦いには、この職業がぴったりだ。

「さて、お兄さん。私はこんな所で死ねないし、死にたくない。
そういう訳だから、全力で抵抗させてもらうよ…！」

「はっ、おもしれぇ！やってみな！」

踏み込みは、同時だった。

しかし、スピードはやはり彼のほうが上なのか、かなり開いていた距離があっという間につめられる。
そしてそのままの速度で槍を振るい、攻撃を仕掛ける。
私はそれを剣で受け流し、相手に一太刀浴びせようと剣を振るう。
相手はその攻撃を受け流し、また攻撃を仕掛ける。

一進一退、まさにこの言葉通りに攻守が反転していく。
だが互いに一歩も譲り合うことなく、各々の武器を振るう。

彼は私を殺すために。私は彼に殺されないために。

だが、その攻防戦にも綻びが見えてくる。

どういう訳か、私が彼のことを押し始めたのだ。

彼には無数の、決して浅いとはいえない傷がある。無論、私がつけたものだ。

対する私は、無傷とは言わないけれど、ほぼそれに近い位の浅い傷しか負っていない。

もちろん、こちらが鎧と盾を装備しているということもあるのだろう。

だがしかし、これは一体どういうことだろうか。

こちらからしてみれば好都合なのだが、どうにも違和感が拭えない。

何かのタイミングをうかがっているのか、それともこちらの攻撃パターンを観察しているのか。それらとはまた別のことか。

どちらにしろ、警戒するに越したことは無いな。

彼は、今も笑んでいる。

「なかなか、やるじゃねぇかっ！」

「それは、どうもっ！」

彼は楽しそうに言う。純粋に戦いを、楽しみながら。
いくつもの傷を受けながらも、それを感じさせない動き。押しているのはこちら側なのに、まるでこちら側が押されているように感じられる。いや、押していると思っていただけで、実際に押されていたのはこちらなのかもしれない。

すると突然、彼はバックステップで距離をとり、槍を構えたまま、動作を静止させた。
そして、おもちゃを取り上げられたような表情で口を開く。

「俺としては、もちっと続けてたいんだがよ、そうもいってられねぇみたいだ。
そろそろ、決めさせてもらうぜ」

そのまま彼は、きっと秘奥義に近しい技の、絶対的な宣言を口にする。

「刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルグ）――――！」

――――刹那、
彼はこちらへ跳躍する。私の心臓に狙いを定めて。
避けることはできない。防ぐことはできない。なぜか、そう感じられた。
せいぜい私にできることは、その槍を、この身に受けることだけ。
けれど、まだ策はある――――！
やってみなくちゃわからない、一か八かの賭けだけれど。
何もせずに、死んでしまうことは、もう二度とあの子に会えないまま消えてしまうのは、絶対に駄目なことだ！

息を吐き、感覚を研ぎ澄ませ、相手を見据える。
チャンスは一度きり。失敗したら、即ＤＡＥＤＥＮＤの大博打。
彼が目前まで差し迫る。
魔力を籠め、術式を組み立てる。
槍が、今にも心臓を貫かんとしたとき、この技は、発動する――――！
「――――！」

――――鮮血が、舞う。構えていた、盾を落とす。
槍は、確かに私を貫いた。

ただし、心臓ではなく、私の肩を。

――守護方陣。
自分の周りに小規模の魔方陣を張り、触れた敵にダメージを与える。
それを応用して、下から衝撃がくるように術式を組み替え、攻撃を上に逸らしたのである。

どうやら、今もこうして思考できているということは、成功したらしい。
彼は、一瞬驚いた顔をしてから、すぐさま笑みを浮かべ、私から槍を引き抜き、距離を取る。

「…こりゃ驚いた。一応これは、必殺を謳ってるんだがな」

「…ま、結構、ギリギリだったけど、…ね」

痛みでうまく、舌が回らない。肩が、焼けるように痛む。血が、急速に体内から失われていくのが分かる。
この感覚は、もう味わうことの無い物だと思っていた。あの子との戦いで、もう最後だと思っていた。

けれど、私は今、確かに、戦っていた。
どこぞの打ち切り漫画のエンディングのように、私の戦いは、まだ続いていた。

「このまま戦い続けていたいのは山々なんだが、ご帰還命令が出やがった。
そういう訳でだ嬢ちゃん、今度は互いに、全力で殺しあおうぜ」
「はっ、やな、…こった」

そう言って青年は、まるで闇に溶けるように消えていった。
先ほどまで騒がしかった公園が、一気に静寂に包まれる。もう、この公園には、私以外誰もいない。

とりあえずそろそろ傷を治さなくてはとまずい思い、ビショップへ変身する。
術式を組み、キュアを発動させる。傷は問題なく治った。が、術が発動するまでに、結構時間が掛かってしまった。
これはきっと痛みのせいでも、血が足りないせいでもない。
先ほどの青年の言葉が蘇える。

『全力』で、か。一応、あれが全力のつもりだったんだけどなぁ…。
最後の戦いからもうそろそろ、後半年くらいで3年が経つ。それのブランクか、全盛期には程遠く、ぎこちない動きが多かったのだろう。現に術に倍近くの時間が掛かってしまった。
思わずため息がこぼれる。

あの青年は『またな』と言った。ということはまた私を殺しに掛かってくるのだろう。

それまでに、どうにかして身体を、ディセンダーであった頃の身体に戻さなくては。
今から気が重い。

そしてふと、公園にある時計を見てみる。
時計の針はもう夜中をさしていた。

これはまずいやばい。急いで帰って課題をやらなくて…は？

あれそういえば、

私、課題どうしたっけ。

今度は別の意味でため息がこぼれた。
夜風が、なんだか身にしみた。

第四話　一難去ってまた一難（前書き）

無駄に長いです。

第四話　一難去ってまた一難

爆走してきた道を、重い足取りで進んでゆく。

俯きフラフラしながら「課題…、課題…」とぶつぶつ呟きながら歩いている姿は、傍から見れば、きっと受験のストレスで自殺してしまった女子高生の幽霊のように映ることだろう。

幸いにも、すれ違った人はまだいない。

…一体、どこで落としたんだろう。

高校2年生にもなって、マジ泣き寸前である。

ちゃんと名前書いてあるし、誰か親切な人が拾って届けたりしてくれないかなぁ…。

今思えば、課題さえ取りに行かなければ、追い掛け回されたり、殺されかけたりすることも無かったのではなかろうか。

そうだよ、朝早起きして学校でやれば済むことだったんだよ。

…今更、後の祭りか。

しかし、本当にどこで落としたんだか。

思い当たるのは、学校…、は無いな。しっかり課題を抱え込みなが

らガクブルしてたし。後は走ってきた道と、死の追いかけっこが始まった所か。
あー、後者にあるっぽいな。レディアントに変身したのもそこだったし。きっと槍を避けたか変身したかの時に落としたのだろう。
いやまあ、帰り道だから別にいいんだけどね。でも疲れが一押しというかなんというか。やるせない気分でいっぱいな訳ですよ。

しかも言峰教会、もとい、冬木教会の傍を通らなくてはならないという事。それがさらにやるせない気分に拍車をかける。

さっき走っているときにはそれ処じゃなかったので気にはならなかったが、なんというか、こう、はっきり言ってしまうとあの教会の傍を通ると、気分が悪くなるし吐き気がする。
なんと言えば良いのだろうか。わかりやすく例えるならば、某スタイリッシュ戦国アクションゲームに出てくるＣＶ能登さんな第五天魔王の黒い手に手招きされて引きずり込まれそうになる。そんな感覚だ。

あの教会の神父も変な感じだった。
いや、神父に直接会ったことはないのだが、遠目から見たことがある。一目見ただけでなんかもう、吐き気がした。

そういうわけで、本来清浄なはずの教会なのに、いろんなどす黒さ満載な冬木教会とは相性が悪いのである。
……少し遠回りになってしまうが、別の道から行こうそうしよう。

まったく、今日は厄日なんじゃなかろうか。

課題忘れるわ人外がドンパチやってるわ追い回されるわ殺されかけるわで。

私は神様というものに何かやらかしただろうか。

別に神様とか信じてないけど。むしろ私が神様的存在だったし。一部の人間に崇められてたし。まあ向こうでの話だけど。

そうして、坂道に差し掛かったとき、

「あ、れ？衛宮君に…、遠坂さん…？」

一部の生徒の間で、実はアイツの夢は正義の味方なんじゃないかと噂されている衛宮君と、生徒全員の羨望の眼差しを浴びる、穂群原学園のミス・パーフェクトこと遠坂さん。あと黄色い雨合羽を着たなんとも形容しがたい美少女がそこにいた。しかもその美少女は人間ではなく、先ほどまで一戦交えていた青年と同じ気配。警戒はしているようだが、殺気は感じないので放置しておくとして…。

この三人の接点が見当たらない。

「っ…！あ、高倉…？。どうしたんだ、こんな時間に」

「いや、それは私の台詞だけども…。まぁいいや、実は落としてしまった英語の課題を捜索してました」

ここでかっこつけて、ちょっと散歩、なんて言おうものなら遠坂さんに絶対零度の眼差しで微笑まれながら、「へぇ、そうなんですか。」と言われそうな気がしないでもない。
それはなぜかって？彼女を見ていると、どういう訳か守銭奴（アニ）な猫かぶり（ス）を思い出すからだよ。

「あ、もしかしてこれのことか？」

「あっ…！それだ！ありがとう衛宮君！」

なんと、衛宮君が私の課題を拾っていてくれてたらしい。
直接渡せてよかった、と照れたように微笑んでいる衛宮君から直接課題を受け取る。…うっかり惚れちまったらどうしてくれる！この一級フラグ建築士め！
よかった、よかったと興奮する私を微笑ましそうに見つめる衛宮君。
ちょ、こっち見んなよ／／／／照れるだろ／／／／／／／／

すると、

「…ねぇ、高倉さん？」

と、冷ややかな声色の遠坂さんから声をかけられた。
課題が思わぬところで見つかり、興奮して熱くなっていた身体が一気に冷める程度に、彼女の声色はとても冷たかった。
油の切れたブリキ人形の如く彼女のほうを向いてみると、声色と同じくらい冷ややかな瞳なのに笑みを浮かべている遠坂さんと、視線が武器だったらまず間違いなく即死レベルなくらいに睨みを効かせた黄色い雨合羽の美少女がこちらを見ていた。

なんだか、いやな、あせを、かいてまいりました。

「どうして、高倉さんの課題がこんなところに落ちていたのかしら？
高倉さんのお家は、確か反対方向だったわよね？」

まるで囁くように、聞き分けの無い子供に言い聞かせるように問いかける彼女。
え、とおさかさんちょうこわい。
これはあれか、この私を差し置いて、何衛宮君と楽しそうにおしゃべりしてるのかしら？みたいな修羅場発生？
まずい、まずいぞ。私の明るい学校生活の為に何とかして彼女の誤解を解かなければ…！

「あ、いや、そのですね。話せば長くなると言うか、なんと言うか…。その…！

付加硬直なんです！！！！！」

一瞬、別な意味で空気が凍りました。ガリッって音もしました。

「すいません噛みました。
不可抗力なんです。すいません噛みました」

「えっ？ああ、うん。大丈夫よ？落ち着いて、ゆっくり話して頂戴？」

私は今、目も当てられないようなひどい顔をしているのだろう。遠坂さんが急に優しくなった。
だが痛い。これは痛い。遠坂さんのやさしさが痛い。衛宮君の気遣わしそうな目線も痛い。美少女の哀れむような視線も痛い。舌も痛

い。
とりあえず落ち着こうと深呼吸を繰り返し、何とか落ち着いたところで、口を開く。

「あー、その、ですね。課題を学校に忘れたことを思い出しまして。時間が夜に差し掛かってたんで急いで学校に取りに行って、帰ってくる途中に、なんていうか、その。
変質者に追い掛け回されまして。
たぶん逃げ回っているときに落としたんだと思います…」

嘘は言っていない。嘘は。

「それで、なんとか変質者を撒けたんで、落とした課題を探し回っている途中に遠坂さんたちに会ったしだいでございます…」

「変質者って、大丈夫だったのか！？」

「ああ、うん。なんとか」

純粋に心配してくれている衛宮君には申し訳なさを感じつつ、遠坂さんの方を窺う。
彼女は何かを思案し、何かに思い当たったような顔をした後、何事も無かったの用に、困ったように眉を下げながら、

「そう、大変だったんですね」

とだけ言った。
とりあえずは納得していただけたようだ。
ほっと胸を撫で下ろしつつ、それじゃあこれでまた明日。と立ち去ろうとすると、またもや遠坂さんからストップが掛かる。

「一応、先生と警察に不審者の特徴を伝えようと思うんです。
その不審者の、特徴と、何があったのか、何を見たのかを、全部、私に教えていただけますか…？」

……？こ、れは…？

これは、暗示、を掛けられているのだろうか？
彼女から、魔力が伝わってくる。なんか、こう彼女に洗いざらい全部喋ってしまいたくなる衝動に駆られるということは、これは尋問系の暗示なのだろうか？

…一応掛かった振りをしておいた方がいいのだろう。私は一般人ってことになっているし。でも全部を喋るわけには行かないし、ううん。どうしたものか。
…肝心なところはぼやかせば大丈夫、かな？よし、それで行こう。
唸れ私の演技力！

「誰かが、校庭で戦っているのを、見ました…」

「「「！？」」」

「遠くからだったので、よく見えなかったけど、怖くなって、女子トイレに逃げ込みました…」

「…それから？」

「静かになって、暫らくしてから外にでて…、帰り道で、変な人に、襲われました…」

「っそいつの、特徴は…！？」

「特、徴は……」

「　全身、青タイツ　」

「……、っはぁああ！！？？」

おお、暗示の魔力が途切れた。いやまあ、狙ってやったんだけどれも。私の演技力も捨てたもんじゃないね！
まあきっと遠坂さんたちは、槍を持っていたとか、そういった類の特徴を期待していたのだろう。

正直ここまで驚いてくれるとは思ってなかったよ、本当に。あ、衛宮君と美少女ずっこけてる。
いや、だってインパクトが強すぎたんだもんよ。あの青年の服装。
そして遠坂さん。貴女はやはり、猫被りだったんだね。

「ん？あれ、どうしたの三人とも？」

「あ、いや、なんでもない…」

「そう？それじゃあもう遅い時間だし、私はもう帰るよ」

「ええ、気をつけてね…」

頭が痛いと言う風に、元気の無い返事を返してくれる二人。
ごめんなさい、ぶっちゃけ速く英語の課題片付けたいんです。そしてこのままここで私と出会ったことは無かったものとして扱って欲しいかな。
ああ、ようやく家に帰れる。そう思いながら足取り軽く、坂道に背を向け、歩き出す。

「ねぇ、」

と、
背後からの呼びかけ。

「お話は終わり？」

幼く、天使を思わせるような少女の声。
そして、人ならざる者の、巨大で、凶悪な気配。
振り返ってはいけないと、本能が叫ぶ。
これは危険だ、速く逃げろと。

「――――――――バーサーカー」

と、誰かが呟いた。
思わずため息をつきたくなる衝動を抑え、後ろを振り返る。
そこには、
雪のような白銀の髪に、ルビーのような赤い瞳を持った少女と、
異質としか言いようが無いほどに凶悪で、いいかんじに最悪な、人
とは思えないほどの巨大な体躯。

「こんばんは、お兄ちゃん。こうして会うのは二度目だね」

お兄ちゃん、となると衛宮君の知り合いか？
視線を投げかけてみると、彼の顔には訳が分からないと書いてある
かのように呆然としている。

「――――驚いた。単純な能力だけならセイバー以上じゃない、アレ」

遠坂さんが、まるで親の敵を見るような眼で、呟く。
美少女も、雨合羽を脱ぎ捨て、何処からとも無く取り出した剣を構
え、臨戦態勢に入る。

そして、私は――――――、

そういえば、今日の星占い、最下位だったなぁ。と、
現実逃避をしながら、これから始まるであろう戦いに、嫌な予感を
禁じ得ないのであった。

第五話　二度あることは三度ある（前書き）

中二病展開です。例の如く展開が速いです。

第五話　二度あることは三度ある

「アーチャー、」、と。

「アレは力押しでどうにかなる相手じゃない。ここは貴方本来の戦い方に撤するべきよ」

そう、遠坂さんが、見えないけれど、そこにいる誰かに向かって話しかける。

きっと、槍の青年とそこに居る美少女。そして白銀の少女の傍に佇む、あの禍々しい巨人と同じような存在なのだろう。

そして、力押しと本来の戦い方、という言葉から察するに、あまり前衛向きではないのだろう。

ああ、もう嫌な予感がひしひしと。

もうここまできてしまったら、巻き込まれるもクソも無いのだが一線はまだ越えてないはずだと自分に言い聞かせ、数歩後ろに下がって彼女達の会話を聞かないように勤める。
そして坂の上にいる、白銀の少女を観察してみる。
年齢は私達よりももっと下。とても愛らしく可愛らしいのだが、それは作り物めいた感じの可愛らしさだ。
私がそちらをじっと見ていたことに気が付いたのか、目が合い、こんばんはと微笑まれた。思わず会釈をしてしまいました。こんな時に何やってんだ、自分。

そして笑みを浮かべたまま、少女は口を開き、
これから宝箱を開ける直前の、わくわくとした、そんな声色で、――言う。

「相談は済んだ？なら、始めちゃっていい？」

少女は、映画のワンシーンのように行儀良く、優雅に、華麗にお辞儀をした。
何とまぁ、この緊迫した雰囲気に不釣合いな。そう思わないでもないが、そのお辞儀が一層緊迫感を高めている。

「はじめまして、リン。私はイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンって言えばわかるでしょ？」

「アインツベルン――――」

何かその名前に思い当たることでもあるのか、遠坂さんが驚いたように身体を微かに揺らす。
憎々しげに、そのまま舌打ちでもしてしまいそうな雰囲気を纏わせ、顔が歪む。

そんな遠坂さんの反応に、まるでいたずらが成功したかのような笑みを浮かべる少女。

そして、そのまま、

「――――――じゃあ殺すね。やっちゃえ、バーサーカー」

と言い放ち、それに呼応するように、黒い巨人が飛ぶ。

人に軽々しく殺すとか言っちゃいけません。なぜか、小学校の頃の先生を思い出した。

こうしてアホなこと考えている間にも、巨人は近づいてくる。何十メートルかは知らないが、長い坂を一気に飛び降り、あっという間に目前まで巨体が迫る。

「――――シロウ、下がって……！」

――――――刹那、流星が落ちてきたのではないかと錯覚するくらいの『矢』が、黒い巨人の、おおよそ人間の急所と呼ばれる部分にぶち当たる。

数えて八撃。建物なんかは粉々になるんじゃなかろうかというまでの威力。普通の人間には、まず間違いなくオーバーキルになるシロモノだろう。

……普通の人間であれば、の話だけれど。

つまりはまあ、全く効いていない。

遠坂さんと衛宮君の顔が驚愕に染まる。

そんな二人を庇うかのように剣を構え、バーサーカーと呼ばれたこちらへと向かってくる黒い巨人を迎撃する美少女。

ぶつかり合う剣と剣。火花を散らしながら剣が交差する。

今実際に自分の目の前で起きている出来事なのに、スクリーンを通して眺めているような気分で、私はその戦いを、他人事のように眺めて、ぼんやり立ち尽くしていた。

美少女が、力任せでありながら正確な一撃一撃を、見事な技術力によって捌いていく。それを絶妙なタイミングで援護する閃光の矢。しかし、やはりというか、そのバーサーカーは矢を物ともせず、美少女へ打ち込む。

美少女が善戦するも、敢え無く吹っ飛ばされ、アスファルトの上を転がる。

追い討ちを掛けようとするバーサーカー。それを阻止する為に放たれた、弾丸の矢。

その攻撃をものともせずに突き進む黒の巨体。

そして、美少女に強烈な一撃を叩き込み、再び、彼女は吹っ飛ばされた。

しかも頭を強く打ち付けたのか、彼女は地面に膝を付けたまま、一歩も動かない。

そんな彼女に止めを刺そうと、巨人が歩み始める。

そうはさせまいと遠坂さんが、何か石のようなものを取り出し、呪文のようなものを唱え、放つ。

焦燥が顔に浮かんでいるも、確実に、かつ正確に、決して脆弱ではない魔力がバーサーカーへと向かってゆく。

だが、それも効かない。

衛宮君が、掠れた声で何かを呟く。

きっと、なんて化物だ――――。よく聞き取れないが、きっとそんなこと言っているのだろう。

続いて、白銀の少女が何かを言い放つ。

もう、なんて言っているのかが、分からない。聞こえない。

そしてその少女の言葉に呼応したのかは分からないが、バーサーカーは美少女に向かってもう一度、剣を薙ぎ払い、彼女はそれを剣で受け止めはしたものの、疲弊した身体で耐えられるわけもなく、

あっけなく、彼女は数十メートルも先にある荒地に吹き飛ばされた。

そして、またそれを追っていく、黒の巨人。今度は、白銀の少女を肩に乗せて。
美少女を助けるために、衛宮君と遠坂さんが走る。高倉さんは、ここで待っててと言って。

それを私は立ち尽くして、見ているだけ。

嗚呼、私は一体何をしているのだろう――――――。

美少女も見えない誰かも遠坂さんも衛宮君もただ立ち尽くしていた私を守ってくれていた私にも戦う術はちゃんとあったのに自分の保身の為に説明が面倒くさいと思って何もしなかったそんな中私に被害が及ばないように戦っていた美少女は剣を持って強大な敵に挑んだ見えない誰かは矢を持ってそれを援護した遠坂さんは彼女達のサポートに勤めた衛宮君は私を背に庇っていてくれていた彼女達は絶望的な状況でも諦めずに戦い続けていたなのになのに、

――――――私は、何もしなかった。

救世主（ディセンダー）が、聞いて呆れる。

いつから私はこんな臆病になったのだろう。いつから、自分のためにしか動けなくなったのだろう。

かつての仲間達がいないと、かってに地球(こっち)を見限って。
仲間の為に使っていたこのレディアントを、自分のためだけに使って。

私は、何がしたいのだろう。如何したいのだろう。

――――しかし、思考に嵌りそうになる直前、私にはもう、ある変化が起きていた。

ビショップになり、どういう訳か荒地の方向、彼らが走っていった方に向けて、
私もう、すでに走り出していた。

なんだ、もう答えは出ていたんじゃないか。

私は彼らを助けたいんだ。

私を助けてくれた、あの人たちを。
単純だな、私。いやまあでも、与えてくれた好意には、好意で返さなくちゃ。
私はさらにスピードを上げ、美少女を助け出すために、ただ走った。

荒地の先には、確か墓地があったはずだ。
美少女がそれに気づいてうまくやり過ごしていて暮れればいいのだが。念のため、さらにスピードを上げる。

それが功をなしたのかどうかは知らないが、墓地に到着した。

どうやら、墓石を盾に戦い続けているらしい。遠坂さんと衛宮くんも居る。
無事、ではないけども、まだ生きてくれているようで何より。
向こうはまだこちらに気づいていない。
それは好都合。いつものように術式を組み立てる。魔力の無駄なく、正確に、迅速に。
あれだけ急いだのにも拘らず、思考はいやにクリアだった。
術式を組み終える。後は発動するだけ。
覚悟は決めた。後は、戦い抜く意志を持つだけ――――――。

「――――――キュア！！」

美少女にあった傷が治ってゆく。それを確認して、また新たな術を発動させるために杖を構える。
それから、その場に居た全員が、私と言う闖入者のほうを向く。

「…え？たか、く、ら……？」

衛宮君が恐る恐るといったふうにこちらに問う。

突然の乱入に加え、制服ではなくローブを着用し、あまつさえ、術を使ったのだから、彼の反応は当然と言えば当然だろう。

そして、やはりと言うか、一番最初に平静を取り戻したのは白銀の少女だった。

「へぇ、お姉ちゃん、面白い魔術を使うのね。しかも、さっきまで魔力なんか一欠けらも感じなかったのに」

探るように目を細め、こちらを窺う少女。
しかし、私はそれを意に介さず、ありったけの魔力を籠めて、

「――――――ディバイン・セイバー！！」

術を、発動させた。
バーサーカーの頭上に、魔方陣が展開される。
そして無数の雷が、彼を襲い、撃ち貫く。

「■■■■■■■■■■■■■！！！！！！！」

腹のそこにまで響くような咆哮。
そして、あたりは一面の砂埃に覆われる。

「…や、ったの…？」

あ、それはまずいぞ遠坂さん。
だってそれは、

「すごい……。
バーサーカーを、

…5回も殺すなんて…」

少女がそう呟いた後、お約束のように砂ぼこりが晴れる。
そこには、お約束のように、

黒い巨人が立っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7987y/

Fate/RADIANT MYTHOROGY

2011年11月27日16時55分発行